

「京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援と学生による
フィリピン政府に対する事業結果のフィードバック参加報告書」

京都大学文学部社会学専修3年 伊藤志帆

スラム街と5つ星ホテルが共存し、多くの矛盾を抱える国。人々がおおらかにたくましく生きる国。私がフィリピン研修を終えて描いたフィリピン像、フィリピン人像は混沌としていて、自分でもまだうまく整理ができていません。特に印象に残っていることを語ることで今回の活動について振り返ろうと思います。

まず印象深いのは、今回の研修の主な活動であったCFO（在外フィリピン人委員会）での7回にわたるプレゼンテーションです。フィリピン人が渡航前に受けるカウンセリングの中で日本についてのオリエンテーションを担当し、最終日にはフィリピン人カウンセラーの前でプレゼンを行いました。1回目のプレゼンは慣れておらずしどろもどろになってしまいましたが、回数を経るごとに安定してプレゼンできるように内容になり、英語でのプレゼンテーションに自信ができました。またプレゼンの最中や前後には日本渡航希望者と会話する機会があり、彼らの置かれている状況や日本に対するイメージを理解する手助けになりました。プレゼン内容に関してはやや一方的なプレゼンになってしまったという反省があります。フィリピン人が日本に対して持っている知識をもっとリサーチすべきでした。予想していたよりも渡航希望者たちは日本について知っており、ジェスチャー、食文化、行事などの中には日本とフィリピンの類似点があったのですが、フィリピンにない制度や公共機関についてはあまり知っていませんでした。このような知識の偏りをあまり考慮しておらず、冗長であったり、逆に説明があっさりしていて理解が難しい個所がありました。とくに制度や施設については、誤解や勘違いを防ぐためにもっとスピードをゆっくり何度も説明するべきでした。渡航者がプレゼンの最中に「わからない」という表情をするたび、事前リサーチの必要性や文化の違う相手に自分の文化を説明することのむずかしさをひしひしと感じました。

もっとも衝撃的な経験を挙げるとすれば、橋の下や川沿いに暮らす貧困層の人々を支援NGOとともに訪問したことでしょう。彼らの存在は新聞などで見て知っていましたが、実際にその場に身を置き、動物やトイレのようなにおい、泥のついた手足や顔のまま裸足で走り回る大勢の子供たちなどを見る

のはあまりにも大きな衝撃でした。なぜこんなにも貧困に陥ってしまうのだろう、ここで暮らす人たちは自分の生活をどのように思っているのだろう、毎日どうやって稼いで生きているのだろうと疑問が渦巻き、自分の生活とのあまりの違いや、ショッピングモールで買い物を楽しむフィリピン人との格差に愕然としました。彼らの生活を目の当たりにしてもなにもできない自分が悔しく、まずはこの悔しきや驚きを忘れずにしていこうと考えるだけで精いっぱいでした。

日本との大きな違いとして驚いたのはフィリピン人のしゃべり好きでおおらかな性格です。特にフィリピン大学で日本研究を専攻している大学院生のゼミを見学させてもらった時に、彼らの活発な日本政治に関するディスカッションに圧倒されました。発表者だけでなくほかの学生も補足事項や自分の意見を次々と述べる態度に、日本の授業での消極的な議論姿勢との差を感じました。授業後の日本について質疑応答では、日本の若者文化についてなどの質問攻めにあい、彼らの知識の深さと好奇心旺盛な態度にまたまた圧倒されました。初対面でもとてもフレンドリーに話すことができ嬉しく思うと同時に、彼らの姿勢に圧倒されてばかりで悔しく思いました。かれらの積極的に議論する姿勢や誰とでもすぐに打ち解けて話せる性格など、見習うべきところがたくさんあると感じました。

今回の研修では、日本への渡航者やストリートチルドレンなど、今までの自分が全く想像していない生き方をしている人々に出会い、フィリピン社会や日本社会の矛盾に腹が立つことが多々ありました。それと同時に、フィリピン人の温かさや親しみやすさにも多く触れる機会がありました。自分がこの経験をどのように生かすことができるか考え続けていかねばならないと感じています。